

## S. ウィルダースピンに関する一考察 (その1)

— *Infant Poor* (1823)<sup>1)</sup> の検討 —

佐藤実芳

### はじめに

1816年、社会主義者オーエン (Owen, Robert : 1771-1857) は、スコットランドのニューラナーク (New Lanark) で自ら経営する工場内に、労働者の子弟を対象とした人格形成学院 (Institution for Formation of Character) という教育施設を開設した。同学院には、1歳半から5歳までの子どもを対象とした幼児教育部門が併設された。そこでは、初等教育において伝統的に用いられてきた教育方法とは異なり、当時としては大変画期的な教育実践 (実物教授、体罰の禁止、音楽の導入、運動場の使用等) が行なわれた。そのためイギリスの最初の幼児学校は、オーエンのニューラナーク幼児学校であるといわれる。イングランドでは1820年代に入ると、ニューラナーク幼児学校に続いてウィルダースピン (Wilderspin, Samuel : 1791-1866) が中心となって数多くの幼児学校を設置した<sup>2)</sup>。このようなイギリスに幼児学校を設置・普及させようとしたウィルダースピン等の運動が、一般に幼児学校運動とよばれている。

ところで従来のオーエン中心の幼児教育史の立場によれば、幼児学校運動の中心人物であったウィルダースピンは、取るに足らない人物として無視されがちか、あるいは幼児学校を質的に低下させた張本人であるなどという消極的な評価が目立つ人物であった<sup>3)</sup>。しかし1960年代から W. P. McCann がウィルダースピンの本格的な研究を始め、1982年に彼はウィルダースピンの子孫にあたる F. A. Young と共著で、これまでの研究の集大成ともいえる研究書『サミュエル・ウィルダースピンと幼児学校運動 (*Samuel Wilderspin and the Infant School Movement*)』を公刊した。ウィルダースピンを「幼児学校のパイオニアとして正しく位置付ける」<sup>4)</sup>ことを目的としたこの著書は、彼の生涯、特に幼児学校運動についてかなり詳細に解明された内容となっている。幼児学校運動がイギリス教育史に果たした重要な役割とウィルダースピンの業績が明らかにされることにより、イギリスではウィルダースピンに対する低い評価が覆され、19世紀前半の幼児学校運動に対する関心が高まってきた。

ウィルダースピンは、教育に関する著書を5種14版ほど出版している<sup>5)</sup>。しかしこれらを網羅的に所蔵する図書館はイギリスにもなく、British Libraryですら3種5版しか所蔵していないという状況であった<sup>6)</sup>。ところが19世紀イギリスの教育思想家の代表著作を集めた『19世紀のイギリス教育論 (*British Educational Theory in the 19th Century*)』(1993年)の中に、ウィルダースピンの *Infant Poor* の第2版が収められた。150年あまりの間、1冊として復刊されることが

なかっただけに、今回の出版は、イギリスにおけるウイルダースピン評価に対する変化のあらわれといえる。

## 本稿の目的

ウイルダースピンの幼児学校運動は、大きく3つに分けられる。すなわち、スパイタルフィールド幼児学校 (Spitalfields Infant School) で初めて幼児教育活動に携わり成功を収めた第1期 (1820年～1824年)、スパイタルフィールドを離れて幼児学校普及活動に従事した第2期 (1825年～1836年)、その後幼児学校運動を引退するまでの第3期 (1836年～1846年) である。

ウイルダースピンの幼児教育観や教育方法論の理念上の展開を明らかにするためには、彼のスパイタルフィールド幼児学校での教育実践を正確に検討することと、彼の著作の記述内容の変遷を明らかにすることが必要である。前者の検討は既に行なっている<sup>7)</sup>ので、本稿では後者の手始めとして5種14版ほどあるウイルダースピンの著書のうち、最初の著書である *Infant Poor* (1823) を検討することにする。

ウイルダースピンは第1期に、*Infant Poor* の初版 (1823年) と第2版 (1824年) の2冊を出版している。版が異なる2種類の *Infant Poor* は、初版では183頁であるのに対し、第2版では228頁とかなり頁数が異なるうえ、著述内容もかなり変化している。また以後の著作は、*Infant Poor* (1823) に対する評価を加味して執筆されたものである。それゆえこの著書には、彼が最も強調したい点が端的に表現されていると考えられる。したがって *Infant Poor* (1823) を検討することにより、ウイルダースピンの最も初期の幼児教育観や教育方法論などを明らかにすることができる。

## *Infant Poor* (1823)

### 出版の経緯

ウイルダースピンが初めて幼児学校の管理と運営の責任者となったスパイタルフィールド幼児学校は、1820年7月に開校された。幼児学校を直接指導した経験のないウイルダースピンは、様々な困難にあいながらも、オーエンやブキャナン (Buchanan, James : 1774-1857)<sup>8)</sup> の助言を受け、試行錯誤のうえ自らの経験にもとづいた独自の幼児教育実践を展開していった。同幼児学校は間もなく世間の注目を集め、多くの著名な人物の訪問を受けるようになった。スパイタルフィールド幼児学校を訪れた人々は幼児学校にとっても関心をもち、彼らは幼児学校についてより詳しく知りたいので、幼児学校についての著書を出版して欲しいという要望を出した。さらに、幼児学校のことが広く知られるようになれば、幼児学校の価値が認められてその普及が促進されるであろうという期待から、貧困階級の子どもにとって幼児学校は是非必要であると考えた人々からも、幼児学校に関する著書の出版が強く望まれていた。

こうした要請に応じて、1823年にウイルダースピンは最初の著書である *Infant Poor* (1823)

を出版した。スパイタルフィールド幼児学校での彼の幼児教育実践を紹介したこの著作は、かなりの反響を集めた。翌年に出版された第2版の序文には、「この本の初版が飛ぶように売れたため、更に高い評判を得るために筆を加えて再版するように勧められた<sup>9)</sup>」と記されている。

## 目 次

*Infant Poor* (1823) にはどのような事柄が記述されているのであろうか。目次は以下のような項目からなっている。

序論／スパイタルフィールド幼児学校に入学することを許可された子どもの親が守る規則／教師が守る規則／指図について／アルファベットを教える一般的な方法—300人もの子どもが15分でアルファベットを如何に唱えるか／アルファベットを教える第2の方法—文字の書き方と文章の書き方／積み木を用いて算術の法則を教える方法／幼児に楽しく体操と知育を行なう方法／幼児に絵を用いて教える方法／賞罰について／清潔について／300人もの幼児を収容することができる学校の規模／子どもを恐がらせることにより招く悪い結果について／子どもがかかりやすい病気と学校で広まる伝染病を予防する最善の方法について、火傷の手当て／学校での事故防止策／2歳から7歳の子どものがさらされている危険について／人格形成について／少年非行について／幼児がどのように非行に走るか、極めて幼い頃から子どもを厳しく監視することが如何に必要であるかを示す若干の事実／play ground／教員の資質／結び

内容は次の6点にまとめることができる。すなわち、①ウイルダースピンの幼児観・人間観 ②幼児学校の必要性 ③幼児学校の施設・設備 ④幼児学校での教育内容と教育方法 ⑤幼児学校の生活 ⑥幼児学校の教師の資質、以上がそれである。以下項目ごとに著述内容を検討していく。

### ウイルダースピンの幼児観・人間観

「人間は誰一人として生得観念をもって生まれてくる者はいない。他の人から得たもの以外は何もない。内なるものは何もないが、あらゆる種類の知識を吸収する能力を備えている。」<sup>10)</sup>人間は白紙の状態で生まれてくるのであり、どのような人間に成長するかは誕生後の環境から受ける影響により全て決まるとというのが、ウイルダースピンの考えであった。つまりよい影響のみを受けて成長すれば理想的な人間になるが、悪い影響を受けて成長した場合には問題のある人間になってしまう。しかし人間社会には、よい環境ばかりあるわけではないし、逆に悪い環境ばかりあるわけでもない。それではよい環境と悪い環境と、どちらが人間に影響を及ぼしやすいのであろうか。

人口増加と貧困により、当時イギリスでは犯罪増加が深刻化していた。*Infant Poor* (1823) においては、特に「少年非行について」という1項目が設けられ、ウイルダースピン自身が街頭で目撃した犯罪例なども含めて少年非行のことがかなり詳細に論じられている。ウイルダー

スピンは幼い子ども達が犯罪に手を染めていく現実を目のあたりに見て、「人間は本来、善よりも悪の方に向かいやすく、正義より悪事を吸収しやすい」<sup>11)</sup> のであると考へた。したがって、子どもたちはよい環境のもと、十分な保育を受け、常にその言動に注意が払われていないと、知らず知らずのうちに問題のある人間に成長してしまう危険がある。それゆゑ従来学校教育の対象にはならなかつた幼児の教育が非常に重要な意味をもつようになったのである。

### 幼児学校の必要性

ウイルダーズピンは、幼児学校の役割を5点あげている。まず第一の役割は、犯罪増加を阻止することである。性悪説的な人間観を有するウイルダーズピンは、善良な人間に成長するためには、幼児期より十分な保育が必要であると考へていた。しかし、産業革命の結果大量の低賃金の未熟練婦人労働が搾取され、労働者の家庭は共働きせずには生活できないような状況に追い込まれていった。そのため母親は家庭で子どもの世話をすることができなくなり、家で子どもに留守番をさせるか、街頭に放置される子どもが多くなつた。犯罪が横行する街頭に放置された子ども達は、窃盗などの犯罪を犯すようになり、なかには大人に利用されて悪質な犯罪を繰り返す子どももいた。このように幼児学校には、街頭から子ども達を隔離することにより、子ども達が悪い習慣を身につけるのを防止するという役割が第一に指摘される。

当時、子どもを取り巻く環境には危険なことが多くあつたので、子どもを危険から守ることが幼児学校の第二の役割であつた。では、具体的にはどのような危険があつたのであろうか。まず、子ども達だけで留守番をしている場合があげられる。貧困家庭は経済的な理由から3、4階の屋根裏部屋に住んでいることが多かつた。子ども達だけで留守番していると、階段から転がり落ちて大怪我をするということがよくあり、それが原因で身体障害者になる人も少なくなかつた。階段から転倒することを防止するために部屋に鍵をかけた場合には、外を見ようとして誤って窓から落ちて死亡するという事故が多発していた。子どもだけで留守番していたために焼死するという事件も毎週のようにあつた。次に街頭で放置された場合には、行方不明になつたり、池で溺れたり、馬車にひかれたりという危険があつた。幼い子ども達を幼児学校に収容することで、こうした危険から子ども達の命を守ることができるのである。このように幼児学校は犯罪増加の防止と幼児の事故防止という役割があるので、「幼児学校は国家にとって非常な利益を生むものである」<sup>12)</sup> とウイルダーズピンは確信していた。もちろん幼児自身にとって幼児学校が有益なものであることは言うまでもない。当時共働きの家庭では、Dame School<sup>13)</sup> や childminder<sup>14)</sup> に預けられる子どもが増加した。しかし前者の Dame School は年長児を教える片手間に幼児の育児をするにすぎない所であり、幼児は年長児の悪戯の対象となつたり、悪い言動を年長児から教えられたりすることもあつた。当時、後者の childminder とは、「貧困家庭の出身で全く教育を受けていない」<sup>15)</sup> 少女達のことであつた。そのため彼女達は幼児に街頭で覚えた「詐欺、嘘、盗みの他極めて下品なこと」<sup>16)</sup> しか教へなかつた。こうした Dame School や childminder に比べてみれば、幼児のみを対象として教師が指導する幼児学校は、貧困階級の幼児にとっては極めて良い環境であつた。

貧困労働者階級の教育の機会という点においても、幼児学校は大きな意味があった。当時貧困労働者階級の家庭では、8歳以上の子どもは何らかの労働に従事していた。そのため初等学校への就学率は低く、幼児学校を出るとすぐに働き始める子どもが多かった。<sup>17)</sup> 教育の機会に恵まれない貧困労働者階級の子どもにとって幼児学校は唯一の貴重な教育の場となっていた。しかも道德教育に関していえば、一旦不道德や不健全な習慣を身につけてしまうと、それを取り除くことは困難なものである。したがって幼児学校は街頭から子ども達を隔離して教育することにより、彼らに健全な人格をもつ人間に成長する基礎を提供するのである。街頭で過ごし犯罪者となっていく幼児と比較すれば、幼児自身にとって幼児学校がいかに有益なものであるかがわかる。このことが第三の役割である。

四つ目の役割として、幼児学校の存在は初等学校の教育にも良い影響を及ぼしたことがあげられる。共働きの家庭で幼児がいる場合、初等学校に通う児童を休ませて留守番させることがよくあった。しかし幼児学校があれば、児童が子守をするために学校を休むということがなくなる。また幼児学校での生活は、教師や機械的な仕事を分担するために生徒から選ばれた monitor の指示に従うものなので、幼児学校に在籍した子ども達には、指示に従う習慣が身についていた。そのため幼児学校の出身者は、教師の指示に素直に従い極めて教育しやすい心身の状態で初等学校に入学していった。ところが街頭などで幼児期を過ごした子どもは、不道德や不健全な習慣を身につけて初等学校に入学してくる。この場合、彼らを初等学校で教育するには大変な労力を要した。したがって幼児学校は初等学校教育という点においてもとても有用なものであったといえる。

最後の役割として、幼児学校は幼児のみならず親をはじめとする家庭にも良い影響を及ぼしていたことが指摘される。貧困階級の家庭では、家庭生活においても不道德な行動が横行していた。*Infant Poor* (1823) では、父母が家庭で話す悪い言葉遣いを幼児学校で真似た少女の例があげられている。<sup>18)</sup> 悪い言葉遣いの原因が家庭にあることを知ったウイルダースピンは、その子の母親に事実を話し、父母が子どもによいお手本を示さなければ、幼児学校での教育は意味がないものになってしまうと協力を求めた。母親の言葉遣いの悪さを直接批判することはなかったが、その母親は深く反省して言葉遣いを改めた。そしてその少女は再び悪い言葉遣いをすることはなかった。

1823年当時、スパイタルフィールド以外には数校しかまだ幼児学校は設置されていなかった。ウイルダースピンは、国家、幼児自身、初等学校、家庭という4つの観点から幼児学校の役割を述べ、新しい試みである幼児学校に対する理解を求めたのである。

### 幼児学校の施設・設備

定員300人の幼児学校の場合、敷地面積は最低でも「奥行100フィート、間口50フィート」<sup>19)</sup> 理想的には「奥行150フィートないしは200フィート」<sup>20)</sup> が必要であると考えられていた。幼児学校には校舎以外にも play ground と教師用住宅を設ける必要があったため、広い敷地を要したのである。

まず校舎であるが、全生徒が収容可能な大きな学校教室 (school room) とクラス別学習用の小さな学級教室が設けられる。大教室の一方は gallery (階段教室) になっており、もう一方の端に教師用の机が置かれる。階段教室は一斉授業を効果的に行なうために考案されたものである。教室は遊びの時間にも使用されるため、椅子は可動式で授業時間以外は片付けられるような工夫がしてあった。またドアに手をはさまないように「子ども達が前後に揺らせない」<sup>21)</sup> ドアにするなど、校舎内での怪我を防止するための配慮もなされていた。

次に play ground であるが、play ground とは屋外の遊び場で、ブランコなどの遊具が備え付けられ、樹や花なども植えられていたものをいう。この play ground は幼児学校の特徴の一つになっている。つまり「play ground がない幼児学校は Dame School と呼ばれているものと比べて少しも優れていない」<sup>22)</sup> とウィルダースピンは考えていたほどである。ではこの play ground にはどのような教育効果があるのであろうか。

まず、幼児を室内に一日閉じこめておくことは健康に悪い。そこで幼児の生活には屋外の広い遊び場が絶対必要である。幼児学校は単に教育だけではなく保育の役割を担っていたため、屋外の遊び場である play ground は、幼児の健康を促進するためになくてはならない場所であった。このことが第一の教育効果である。

次に、幼児学校では道徳教育が重視されていたが、play ground はその教育効果を確かめることができる貴重な場であった。道徳教育というのは、いくら言葉で理解していても、行動にあらわれなければ意味がない。教室では品行方正な子どもが、play ground では自己本位に行動することが少なくない。play ground での自由な遊びのなかで、子ども達は本当の姿を示すので、教師は実践的な道徳教育を行なう機会を得ることができるのである。このことが第二の教育効果としてあげられる。

また知育にも草花を用いて博物の実物教授を行なったり、手をつないで樹のまわりをぐるぐる回りながら、あるいはブランコに乗りながら聖書や表 (table) を暗唱させたりもした。教室での授業ばかりでは退屈する幼児に、気分転換も兼ねて play ground で楽しく知育が行なわれたのである。これが play ground の第三の教育効果である。

play ground に期待されたのは、このような教育効果だけではない。昼食後のひとときや放課後など、子ども達は play ground で楽しく遊んでいた。街頭よりも play ground での遊びが、子ども達にとって魅力があったのである。街頭から子ども達を連れ出すことをその目的の一つにしていた幼児学校にとって、play ground の果たす役割は教育効果以上のものであった。

最後に教師用住宅についてである。ウィルダースピンは教師夫妻が幼児学校の敷地内に住み込むことを理想としていた。それは子どもの生活管理のために教師が常時校舎の近くにいることが必要であると考えたからである。「幼児学校に教師の住宅を付設する理由は、生徒が食事を持って登校するのを許可するためである。昼食を学校で食べさせることは、街頭から生徒を遠ざけることになる。また昼食のために帰宅した生徒も、すぐに学校に戻ってくる。戻ってきたときに世話をしてくれる人が誰もいなければ、子どもは学校からいなくなってしまう。そのうえ幼児学校に監督者が誰もいなければ、見知らぬ少年が侵入してきて悪戯をするのである

う。」<sup>23)</sup>

このように校舎、play ground、教師用住宅のいずれも、幼児学校の目的を実現するために必要なものであった。

## 幼児学校における教育内容及び教育方法

（知育）

幼児学校は6歳までの子どもを対象とし、しかも貧困労働者階級の子ども達にとって貴重な教育機関であったため、3R'sの基本程度を教える必要があった。*Infant Poor* (1823)で幼児学校の教育内容として取り上げられている知育としては、①国語（アルファベットの読み方・書き方、綴り方）②算数（数え方、四則計算、単位）③聖書 ④博物（動植物）⑤社会（職業、公共施設）があげられる。幼児学校は「学校と保育室が合体したもの」<sup>24)</sup>であると考えていたウィルダースピンは、幼児学校での教育を成功させるために初等学校とは異なる様々な工夫を凝らした教育を実践した。*Infant Poor* (1823)には、スパイタルフィールド幼児学校で彼が実践した教育が具体的に紹介されている。授業の様子については以前紹介したので、本稿ではウィルダースピンが教育するにあたり、どのような点に注意を払っていたかを検討する。

「小さい子どもに一つの事柄を長時間させておくと、うんざりしてそれをするのに飽きてしまう。学習するにはふさわしくない精神状態である。……（中略）……小さい子どもは本来活発なものである。動くことを許さず、ある場所でじっとさせておくと、授業が嫌いになるだけでなく、学校までも嫌いになってしまう。」<sup>25)</sup> 幼児は一つの事柄に短時間しか集中することができないので、幼児が授業に退屈することなく楽しく学習できるように、ウィルダースピンはできるだけ学習場面が変化するように心がけていた。例えば、アルファベットの学習にしても、大きな教室で一斉授業をすることもあれば、小さな教室でクラスごとに行なう場合もあった。大きな教室でのアルファベットの授業では、文字のカードを提示して生徒に読ませていくのであるが、博物の授業のときにも動植物の絵と絵の間に文字のカードを挿入し、学習内容に変化をもたせるという工夫がなされた。この方法は生徒の注意を引くだけでなく、博物と文字の学習が同時にできるという利点もあった。小さな教室では、教師がアルファベット表の各文字を指差して、子ども達はその文字を読み上げたり、「真鍮製の文字を壁に掛けたり、棚に置いたり、釘でかけたりしておき、子どもに取ってこさせる」<sup>26)</sup> 文字探しをさせることもあった。特に文字探しはゲーム的な要素を含むので、子ども達は楽しく学習した。このように同じアルファベットを教えるのにも、教室を変え、教材を変え、幼児でも楽しく遊び感覚で学習できるように配慮していた。

幼児の関心を引くために、視覚教材を用いたのもウィルダースピンの教育実践の特徴である。例えば絵である。子ども達は色鮮やかに描かれた絵に強く関心をもち、その絵について知りたがるものである。博物の授業の場合には、動物、魚、花、昆虫などが描かれた絵が用いられたが、子ども達はその絵が何かとしきりに質問してきた。また、聖書の学習にも絵が活用された。聖書を読むことよりも内容を理解することが大切であると考えていたウィルダースピンは、聖

書の内容を理解させるために、絵を見せて説明していくという方法を用いた。絵は子ども達が聖書の内容を理解するのを助け、その内容を記憶に留めておくのにも役立った。この方法は特にまだ字が読めない幼児に効果があった。このようにウイルダースピンは視覚教材を活用した教育が幼児学校での教育には適していると考えていた。

授業中じっと座らせておくことは幼児の健康によくないので、身体を動かしながらの学習も多く取り入れられた。例えば子ども達は数字を数えながら手足を動かしたり、play groundにあるクラスの樹を回りながら、また天気の良い日には室内のブランコに交替で乗りながら聖書や計算などの表を暗唱した。このようにスパイタルフィールド幼児学校では、知育を体育や音楽と結びつけて、楽しく健康的に幼児が教育されていた。特に教室での授業の後は子ども達をplay groundに出し、体を動かすように指導がなされていた。

(徳育)

「幼児学校の主たる目的は、幼児の心を無邪気で有益なものにさせておくことである。それゆえ、子ども達に読み書きなどを教えることは副次的な目的にすぎない。」<sup>27)</sup> 前述したように、幼児学校が対象としていた貧困階級の子供達は極めて早い段階から不道德なことを学ぶ機会があったため、それ以前に徳育を徹底して行なう必要をウイルダースピンは痛感していた。そこで幼児学校では、知育よりむしろ徳育に力点がおかれた。当時の学校教育では、聖書の教訓を単に説教的に教える道徳教育が行なわれていた。しかし子ども達は遊びをはじめとする日常生活から道徳的習慣を身につけると考えるウイルダースピンは、学校生活全体を通して道徳性を身につけるように指導した。特にplay groundでの子どもの活動には細心の注意を払った。それは「教室では従順に行動するのに、play groundに出ると利己主義的な感情をあらわす子どもが多くいる」<sup>28)</sup> からである。子ども達は学習から離れたplay groundでの活動のなかで真の姿を見せるので、教師はplay groundの様子を常に観察して、子ども達が問題のある行動をとったら即座に指導するべきであると彼は考えていた。

「人間は不完全な存在であり続けるものなので、現存する人間もその子孫も懲罰なしで指導することはできないように思える。しかし懲罰は慎重に用いるべきであるし、また最後の手段として以外は用いるべきではない。」<sup>29)</sup> ウイルダースピン自身、懲罰を用いることなく学校教育ができるという考えがあることは知っていた。しかし、スパイタルフィールド幼児学校では懲罰なしで指導することはできず、懲罰が使用された。ただし懲罰に際し、子どもの個性を十分理解し、個性に応じた指導がなされるように配慮された。というのは懲罰なしでも指導できる子どもも多くいたからである。口頭で何度注意しても効果がないときのみ懲罰が用いられた。肉体的な苦痛を与える懲罰として唯一用いられたのは、棒で手をたたくというものであった。他の子にひどく噛みついた時などに用いられた。精神的な苦痛を伴う懲罰として用いられたのは緑色の布を背中につけ、学校中を歩かせ、他の子ども達が「緑の尻尾、怠け者の緑の尻尾」というGreen-tail (緑の尻尾)<sup>30)</sup>、罰則者が肩にほうきを担ぎ、自分のした悪い行為を言いながら学校中を歩くOld Broom (古ほうき)<sup>31)</sup>、ストーブの柵の中に罰則者を入れ、他の子ども達が「可愛い小鳥、可愛い小鳥」と言うPretty Dicky, Sweet Dicky (可愛い小鳥)<sup>32)</sup>である。いず

れも、ずる休みを繰り返す子どもを指導する時に用いられていた。このような懲罰の目的は、当事者の矯正だけでなく、他の子ども達が懲罰に該当する行動をするのを防止するという効果も狙っていた。

### 幼児学校の生活

貧困労働者階級の子弟を対象とする幼児学校では、少額でも授業料を徴収することは難しかった。スパイタルフィールド幼児学校の場合、Joseph Wilson が同校を設置し、学校運営に必要な経費を援助していたが、同校は財政規模が決して大きくなかったため、ウイルダースピン夫妻が300人近い幼児を指導しなければならなかった。300人もの幼児を2人の教師で指導しなければならないという悪条件のもとで、幼児学校の生活を円滑に進めるための様々な工夫がなされた。

まず第一の工夫として、ウイルダースピンは幼児学校の在籍児とその保護者に対して次のような規則を定めた。すなわち、

- ①洗顔をすませ、髪を整え、ほころびのない衣服を着せて、朝8時までに登校させる。
- ②朝9時までに登校しない生徒は午前中、午後2時までに登校しない生徒は終日自宅で過ごさせる。
- ③昼食持参で子どもを登校させてもよいが、午後5時までには迎えにくる。
- ④無断欠席及び不当な理由での欠席者は、退学処分にする。<sup>33)</sup>

以上がそれである。そして「子どもが入学すると、どの親にも上記の規則の写しが渡された。」<sup>34)</sup> ①は貧困労働者家庭に当時清潔にするという習慣がなかったために定められたものである。②については、遅刻は親に責任があるので、親に対する罰として子どもを家に帰るのが最適であるという理由で定められた。③の規則は、共働きで昼食時に帰宅できない親が安心して就労できるように設けられたものである。④が定められたのは、正当な理由のない欠席が多く、学校運営上問題が生じていたからである。

このように規則は主として両親を対象にし、幼児学校を運営していくうえで最低限必要な、しかも実現可能な事柄にとどめられていた。登校・下校時間の厳守や無断欠席を禁ずることは学校生活を規則正しいものにし、生活の乱れを防止するとともに、学習効果をあげるためには不可欠なことであった。

二つ目の工夫として、ウイルダースピン夫妻が300人あまりの子どもを指導するので、生徒には指示にしたがった学校生活を送ることが要求された。例えば朝の始まりはお祈りと賛美歌で始まったが、次のようにすべて指示にしたがって進行していった。「始業時に私（ウイルダースピン：筆者補充）が指示して、整然と全員を起立させる。その後生徒はひざまずく。一人の生徒がまず短いお祈りを唱えて、最後に神への感謝の言葉を述べる。他の生徒は、彼のお祈りの文句を繰り返す。それから最初の生徒がどの賛美歌を歌うかを告げて、全員が歌う。」<sup>35)</sup>

第三の工夫として、次のようなことがあげられる。すなわち、2人の教師で300人あまりの幼児を直接指導するのは困難なので、クラスごとに monitor を2人選び、機械的な仕事を分担

させる方法がとられた。monitorの仕事は、登校時に手と顔が清潔であるかどうかの検査や「整列させたり、毎朝12人ないしはそれ以上の子どもに100語教える」<sup>36)</sup> ことなど様々であった。このように2人の教師では一斉指導の形を採らざるをえないので、できる限り個別に指導するためには monitorの協力が是非とも必要であった。かくして幼児学校では、教師や monitorの指示に従って子ども達は規律正しい生活を送っていた。

次にウイルダースピンが学校生活のなかで特に考慮したものとしては、伝染病の予防と清潔の習慣ということがあげられる。当時、幼児が感染しやすい伝染病としては麻疹、百日咳、熱病、眼病、天然痘があったが、これらに感染した子どもが登校すると全校でその伝染病が流行する恐れがあった。天然痘は既に種痘が普及していたので、入学時に接種済みかどうか確認され、未接種者には種痘の接種が要求された。他の伝染病対策としては、「必ず1日2回子ども達を検査すべく学校を見回り」<sup>37)</sup>、その結果少しでも病気の徴候がみられる子どもは帰宅させられて、完治するまで登校を許可されないなど徹底した対策が施された。清潔にする習慣のない貧困労働者家庭の子ども達に清潔の習慣を体得させるために、monitorが登校時に彼らの洗顔のチェックをした。そして洗顔せずに登校してきた生徒は家に帰された。極端な場合にはそのような生徒は退学させられることもあった。

### 幼児学校の教師の資質

ウイルダースピンは「ほとんど誰でも子どもにアルファベットを教えることができるので、幼児を指導するために特に必要な能力は必要ない」<sup>38)</sup> という当時の一般論には批判的であった。幼児学校の教師に必要なのは「勤勉さ、優しさ、忍耐強さ、冷静さ、行動力、人間に関する知識とりわけ敬虔さ」<sup>39)</sup> であると彼は考えていた。また幼児学校の教師の言動の影響は、生徒のみならず子どもを介して家庭にまで及んでくるので、彼は教師の「人格はいくら良くても良過ぎることはない」<sup>40)</sup> ことを強調している。

次に子どもの接し方に関してウイルダースピンは以下の4規則を定め、幼児学校の教師にその励行を勧めた。すなわち、

- ①感情的に叱らない。
- ②どんなものでも取り上げたら必ず返す。
- ③約束を守る。
- ④誤りを放置するのではなく、模倣する価値のある手本を示す。<sup>41)</sup>

以上がそれである。

その他の禁止事項として、彼は「子どもが望ましくない行動をしても、暗い穴に閉じ込めるとか煙突掃除のおじさんをお呼んできて、袋に詰めて連れていってもらおう」<sup>42)</sup> などと脅してはいけないことやお叱りの話をしないことなどをあげている。というのは、そうしたことは子どもの心を傷つけ神経質にするからである。

## おわりに

本稿で取り上げた *Infant Poor* (1823) は、ウィルダースピンがスパイタルフィールド幼児学校で約3年間教育実践を行った後に出版されたものである。この約3年間は、彼にとって決して順調な日々ではなかった。幼児学校の必要性和特殊性に理解の薄かった当時、ウィルダースピンの独自の教育実践は理解されず、「開校当初はひどく侮辱され、嘲笑的にされ、汚物さえ投げ付けられ」<sup>43)</sup>、「赤ん坊教授 (Baby Professor)」<sup>44)</sup> と呼ばれた。それにもかかわらず彼が努力を続けていったので、幼児学校の教育が次第に認められるようになり、開校一年後には、彼は「非常に尊敬されて扱われる」<sup>45)</sup> ようになった。

スパイタルフィールド幼児学校の教師に招かれるまで、ウィルダースピンは日曜学校で年少児を担当したこと以外、教育に関わった経験がなかった。300人近い幼児が在籍する幼児学校の運営をまかされた後、彼はオーエンやブキャナンの幼児学校の実践を参考に、毎日試行錯誤を続けていった。こうした状況のもと、*Infant Poor* (1823) は彼自身の幼児教育実践が確立しつつあった時期に執筆されたものである。

本稿では *Infant Poor* (1823) の内容を項目ごとに検討した。この著書の狙いは、貧困労働者階級の幼児にとって如何に幼児学校が重要であるかを論じることにより、幼児学校に対する理解を広め、その設置普及を促進することにあった。そのため同書の内容は当時の貧困労働者階級の子ども達が直面していた危険極まりない状況と、幼児学校が貧困労働者階級に施す恩恵について詳細に論じたものとなっている。ウィルダースピンがあげた幼児学校の重要性は次の5点である。すなわち、

1. 犯罪増加の防止
2. 幼児の事故防止
3. 貧困労働者階級に対する教育の機会の提供
4. 初等学校の教育に及ぼす影響
5. 幼児学校での教育が家庭に及ぼす影響

以上がそれである。

教育実践に関しては、その特徴は次の4点にまとめられる。すなわち、

1. 実物教授の実施
2. play ground の設置と利用
3. 歌唱の教育的利用
4. 保健衛生面の配慮

以上がそれである。

以上の検討結果より、既にウィルダースピン独自の幼児学校に対する考え方はかなり完成したものになっていたといえる。

[註]

- 1) 正式書名は *On the Importance of Educating the Infant Children of the Poor; showing how three hundred children, from eighteen months to seven years of age, may be managed by one master and mistress: containing also an account of the Spitalfields Infant School.*
- 2) 一説には、2000校に及ぶ幼児学校が設置されたといわれる。(Irish University Press Series of British Parliamentary Paper, *Reports from Education of the Poorer Classes with Minutes of Evidence Appendix and Indices 1834-38, Education Poorer Class 6.* June 18 1835. p. 287.)
- 3) 拙稿「Wilderspin 評価にみられる教育史研究の特徴」(『名古屋大学大学院教育学研究科教育学専攻—教育論叢— 第31号』1988年)
- 4) W. P. McCann and F. A. Young, *Samuel Wilderspin and the Infant School Movement*, 1982, Introduction.
- 5) 拙稿「イギリス幼児学校成立の研究—Spitalfields 校の実践を中心に—」(『名古屋大学教育学部紀要 第34巻』1988年) 83頁.
- 6) 拙稿「Wilderspin 評価にみられる教育史研究の特徴」34-35頁.
- 7) 拙稿「イギリス幼児学校成立の研究—Spitalfields 校の実践を中心に—」
- 8) 彼はニューラナーク幼児学校で教師をしていた人物であり、イギリスで2番目の幼児学校 (Westminster Infant School) がロンドンに設立されたとき、教師として招かれた幼児教育実践のパイオニアである.
- 9) S. Wilderspin, *Infant Poor* (1824), p. 9.
- 10) Id., *Infant Poor* (1824), p. 45.
- 11) Ibid., p. 4.
- 12) Ibid., p. 4.
- 13) Dame School は17世紀に誕生したといわれる。それは主として農村部に普及したが、産業革命後には都市部にも普及した。ここでは無資格の女性が子どもを預かったり、3R's を教えたりした。
- 14) 例えば「9歳の子どもが週2ペンスで、母親が働いている幼児を世話していた。」(M. Cruickshank, *Children and Industry*, 1981. p. 19.)
- 15) W. P. McCann (ed.), *Popular Education and Socialization in the Nineteenth Century*, 1977. p. 4.
- 16) S. Wilderspin (1823) p. 124.
- 17) 当時スパイタルフィールドでは「6歳から12歳の幼児のうち約40%が、そして極貧家庭の子弟の約8分の7が未就学である」という状況であった。(W. P. McCann (1977), op cit., p. 22.)
- 18) S. Wilderspin (1823) pp. 156-158.
- 19) Ibid., p. 81.
- 20) Ibid., p. 81.
- 21) Ibid., pp. 96-97.
- 22) Ibid., pp. 169-170.
- 23) Ibid., p. 82.
- 24) Ibid., p. 31.
- 25) Ibid., p. 20.
- 26) Ibid., p. 27.
- 27) Ibid., p. 121.
- 28) Ibid., p. 171.
- 29) Ibid., p. 56.
- 30) Ibid., p. 68.
- 31) Ibid., p. 69.

- 32) Ibid., p. 75.
- 33) Ibid., pp. 10–11.
- 34) Ibid., p. 15.
- 35) Ibid., pp. 16–17.
- 36) Ibid., p. 60.
- 37) Ibid., p. 93.
- 38) Ibid., p. 173.
- 39) Ibid., p. 175.
- 40) Ibid., p. 176.
- 41) Ibid., p. 16.
- 42) Ibid., p. 85.
- 43) Id., *Early Discipline* (1834), p. 25.
- 44) *Report from the Select Committee on Education in England and Wales*, 1835. 6. 18. (179)
- 45) S. Wilderspin, *Early Discipline* (1834), p. 25.